にっぽんど真ん中祭り文化財団 岡田 邦彦理事長インタビュー

どまつりは多様性を持って進化する

名古屋の夏の夜を熱く燃え立たせる「日本ど真ん中まつり」（以下・どまつり）。今年二〇周年を迎えるが参加者、観客ともに右肩上がりで成長の勢いは止まらない。たかが祭り、されど祭り。どまつりを運営する「にっぽんど真ん中祭り文化財団」の岡田邦彦理事長にどまつりの元気の源を聞いた。

――岡田理事長が「どまつり」に関わるきっかけとなったのは？

岡田　どまつりが始まった一九九九年は私が松坂屋の社長に就任した年ですが、どまつりと関わりを持つようになったのは二〇〇三年からです。どまつりの出発点は、一九九二年に札幌で始まったＹＯＳＡＫＯＩソーラン祭りに、名古屋から学生チームを組織して参加した当時中京大学の学生、現在財団の専務理事である水野孝一さんらが、名古屋広小路夏祭りに併催の形で祭りを始めた時からです。私はたまたま二〇〇二年に、当時の名古屋商工会議所の磯村巌会頭のご指名で「まちづくり担当副会頭」を仰せつかっておりました。その間短期間で急激に成長したどまつりに経済界からも支援を、という要請が行政当局からもあって、会議所が一肌脱ぐことになり、〇三年に私がどまつり組織委員会の委員長に就任した次第です。その後〇四年から三年間、愛知県公安委員を務めましたので、側面的にもどまつりを支援できたかなと思っています。

――夏の夜に二万三〇〇〇人もの老若男女が踊り、二二〇万人の見物客が訪れる。行政や警察の理解や協力がなければ難しい……。

岡田　その点、行政当局や警察の皆さんには格別のお力添えをいただいております。それに江戸の昔から、祭りは地域の絆を育てる大切な機会でした。平素は縁の薄い人たちが祭りの時には力を合わせて汗を流します。その地縁が災害などいざという時に力を発揮する。どまつりも、その規模の大きさ、運営方法などから防災訓練につながる要素があります。大会の初期には熱中症がたくさん出ましたが、専門の救急医療ドクターチームの支援により、水分補給や体調管理の徹底を図り、今では熱中症の緊急搬送者はほとんどありません。名古屋で過去二回、どまつりをテーマに救急医療学会が開かれております。この医療サポート体制は名古屋のウイメンズ・マラソンでも生かされておりますし、現在、二〇二〇東京五輪への